

## 南アフリカ共和国からのトウモロコシ輸入の問題

著者	吉田 昌夫
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	アフリカレポート
発行年	1989-03
出版者	アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00008699">http://hdl.handle.net/2344/00008699</a>

# 南アフリカ共和国からの トウモロコシ輸入の問題

・吉田昌夫

1987年に日本は南アフリカ共和国（以下、南ア）にとっての最大の貿易相手国となった。南アのアパルトヘイト政策に公式には反対しながら、貿易拡大を続けていることに対し、国際的に大きな批難を浴びた。同年の対南ア貿易額は41億2249万ドルで、前年比15%増であった。

同年の日本の南アからの主要輸入品目を見ると驚くべきことを発見する。輸入額順位で1位の白金、2位の石炭・コークス、3位の金の次に、4位としてトウモロコシがくるのである。同年に日本は168万トン、221億円にのぼるトウモロコシを南アから輸入しており、その量は1986年の輸入よ

り32%増であった。これは日本のトウモロコシ輸入全量の約10%を占め、飼料用を除く、他用途のトウモロコシ輸入に占める南ア産の率では、より高く35%に達している。

この事実がなぜ問題なのかということ、トウモロコシは南アの黒人の主食であるからで、南アの黒人貧困層が飢えに苦しんでいる時に日本がその主食をかくも大量に買付けてしまっているからである。1987年に日本が輸入した量は、同年の南アの全トウモロコシ生産量の約23%にのぼっているのである（第1表参照）。

第1表 日本の南アフリカ共和国トウモロコシの輸入

年	日 本 の 輸 入				南アフリカの トウモロコシ 生産量* (100万トン) E	C/E (%)
	輸 入 量			輸入額計 (100万円) D		
	飼料用 (トン) A	その他用 (トン) B	計 (トン) C			
1980	4,499	908,402	912,901	34,987	10,840	8.4
1981	85,705	1,343,876	1,429,581	57,098	14,656	9.8
1982	169,767	2,228,717	2,398,484	81,928	8,359	28.7
1983	2,894	1,027,525	1,030,419	35,263	4,083	25.2
1984	—	9,674	9,674	369	4,393	0.2
1985	—	78,033	78,033	1,981	7,397	1.1
1986	81,389	1,198,507	1,279,896	23,804	7,748	16.5
1987	116,438	1,566,299	1,682,737	22,110	7,371	22.8
1988	—	239,689	239,689	4,687	...	...

(注) \* 表示の年に終わる穀物年度。…は不明。

(出所) 関税協会『日本貿易月表』各年12月号；大蔵省関税局『速報』1989年2月；EIU, *Country Profile: South Africa 1988-89*, p.26.; RSA, *South Africa 1985*, Dept. of Foreign Affairs, Pretoria, 1985, p.616.

第2表 コーンスターチ・コーングリッツ・用途別販売量 (単位:1,000トン)

	1985年		1986年		1987年	
	コーンスターチ	コーングリッツ	コーンスターチ	コーングリッツ	コーンスターチ	コーングリッツ
ビール	86	90	90	77		81
菓子	} 1,249	45	} 1,327	49	不	51
調味料(みそ等)		6		6		6
糖類・食品・他		16		20		21
繊維・製紙	161		178			
加工でんぷん	180		191			
医薬		4		5	明	6
鋳型		20		18		19
その他		51		52		54
計	1,676	232	1,786	227	1,995*	238

(注) \*推定。

(出所) 農水省食品流通局資料より作成。

## 1 トウモロコシ輸入増大への圧力

南ア産トウモロコシが大量に輸入されてきたのには、日本における澱粉業界をめぐる複雑な理由がからんでいる。

日本におけるサツマイモ、ジャガイモなど澱粉原料となる農産物生産農家を保護するために、政府は関税割当制を実施しており、国内産澱粉1トンを使用する業者にトウモロコシ7.6トンの割合で無関税輸入を許可し、その他の外国産トウモロコシにはトン当たり1万5000円の高関税をかけてきた。このような数量割当てにより、外国産トウモロコシを無関税で限られた量しか輸入できない澱粉業者は、同じ輸入量でも澱粉含有量(68~70%)の高い南ア産のトウモロコシを選好することになりがちである。このため南アが早魃などで輸出余力がない年以外は、南アから日本が大量に輸入することになる。

1989年度からは、この方式が少し変わって、無関税輸入の枠は、国内産1に対し9の割合に拡大されることとなった。またその枠外のトウモロコシ輸入関税率を徐々に引き下げ、3年間でトン当

り1万2000円までに引き下げるようになった\*。このように輸入トウモロコシの枠が拡大されれば、南ア産トウモロコシ輸入増大への澱粉業界の圧力は、ますます高まることになろう。

## 2 トウモロコシの用途

日本においてトウモロコシは、どのような目的に使用されているのであろうか。飼料用がもちろん大きいですが、ここではそれを除き、南ア産トウモロコシとして重要な、コーンスターチの用途と、コーングリッツ(ひき割り)の用途に分けて考察したい。

第2表に見るように、コーンスターチ販売量はコーングリッツ販売量の8倍ほどにのぼるが、そのなかで重要な用途は、ぶどう糖、異性化糖などの糖類で、これらは清涼飲料やパンなどの甘味として使われる。またケーキ、かまぼこのつなぎ、ベーキングパウダーなどの食品にも使われる。ついで重要な用途として加工澱粉がある。これはべ

\* この措置は、アメリカからの圧力により、貿易摩擦を軽減するためとられたものである。

ニア板接着剤、洗濯のり、印刷材料、医薬増量剤などとなる。また繊維業で糸けば立ちを防いだり、製紙業でインクののりをよくするためにも使用される。

さらに最近重要度を増している用途として、ビールの副原料がある。ビールと名がつくためには麦芽を50%以上使っていないといけないが、副原料としてコーンスターチおよびコーングリッツがよく使われる。最近はやっているドライビールは、コーンスターチの使用量拡大に大きな役割を果たしているのではないかと推測されるが、1987年度の用途別分類が未発表なので、数値でおさえるところまではいっていない。コーングリッツはビール副原料として使用される他に、変わった用途として鋳物を造る際の鋳型用にも相当量が使われる。

このように、コーンスターチ、コーングリッツの用途は非常に多様である。これらは他の種類の澱粉で代用できるものとはいえ、コスト面でトウモロコシが優越性を保っているのが現状である。

### 3 南ア産トウモロコシ輸入の問題点

1987年に168万トンのトウモロコシを南アから輸入したことは、日本の業者側の論理で考えた場合、問題にすることは無いと思えるかもしれない。しかし、トウモロコシを主食とする南ア黒人から見た場合、大変に重要な問題である。豊かに見える南アのなかで、都市の黒人居住区住民、白人農場内の農業労働者、またホームランドの農村居住者が、きわめて劣悪な食生活を強いられ、ことに年少期に栄養失調に陥っている者の率が高いことに留意する必要がある。

1977年にソエトにおいて行なわれた調査によれば、2歳までの幼児の19%、2～5歳の29%、6

～9歳の39%、10～12歳の45%、13～16歳の38%が栄養失調に陥っていると報告されている\*。

栄養失調は主食の欠乏によってのみ起こるものではないが、主食が十分摂取できることが、それを直す必要条件であろう。日本がこのような人々にまわすべきトウモロコシを買い取ってしまうことは、ほとんど犯罪的行為に近いといえないだろうか

168万トンという量は、たとえば同じトウモロコシを主食としているザンビアにおける全生産量より少なくとも30%も多い、膨大な数量である。1988年には日本政府が商社などに南ア貿易自粛を呼びかけたことがきいたのか、速報値では、24万トンの輸入に減少しているが、前述の輸入枠の拡大措置などの影響で、89年には再び増勢に転ずるかも知れない。

経済制裁は結局黒人を苦しめるだけではないか、という声があるとすれば、南アの白人農場で主として生産されるトウモロコシの輸入を止めても、これを主食とする黒人には悪い影響どころか、よい影響を及ぼすだけである。日本は南アのトウモロコシ輸入禁止を、経済制裁の一つとして取り上げるべきではないだろうか。

(よしだ・まさお/地域研究部)

\* P.N.Pillay, *Poverty in the Pretoria-Witwatersrand-Vereeniging Area: A Survey of Research*, Second Carnegie Inquiry into Poverty and Development in Southern Africa, Paper No.18, Cape Town, 1984, p.19.